

エディトリアル

地域医療研究所 地域看護研究センター センター長 中出みち代

静かな話題になっている『おみおくりの作法』という映画を見ました。予測では、2030年に、65歳以上の約40%が単身世帯となります。一人で死んでも、孤独ではない。一人ぽっちで死を迎えても、孤独でない生き方がある。一人ひとりの死に真摯に向き合う主人公ジョン・メイの生き方が、胸に響きました。

同様の世界を、今回の訪問看護師のさまざまな活動記録を通して、実感しました。2025年を視野に、医療提供体制の変革を余儀なくされています。超高齢化・多死社会を迎え、病院から在宅へのシフトにより、看護への期待が増大しています。単身でも、認知症でも、住み慣れた地域で、住み慣れた家で最期まで過ごすことができたら、瞳は輝き続けるのではないのでしょうか。

国が目指している地域包括ケアシステムの構築を、地域医療振興協会は早くから、着手してきました。地域医療振興協会として、地域を支えてきた診療所・病院の訪問診療に携わる医師、訪問看護に携わる看護師の強い意志力に支えられての実践です。ようやく、医療・介護の報酬で24時間機能強化型訪問看護ステーションや緊急時訪問に対する加算が新設されます。医療と介護が別々では、立ち行かない実態を、訪問看護師も訴えています。生活機能の維持向上を目指すリハビリテーションの提供と共に地域での実践を積み上げていきたいと強く思いました。

『在宅医療を支える訪問看護師の活動』と題し、さまざまな観点から述べていただきました。これから訪問看護に取り組もうと考えておられる方々、現在取り組んでおられる方々にも大きな指針となると信じています。

昨年6月、医療介護総合推進法案が制定され、さまざまな動きが始まっています。意志に支えられてきた活動を大きく後押しできる改革につながればと念じ、エディトリアルといたします。